

陳垣撰 野口善敬訳註 『訳註 清初僧諍記』

柴田, 篤  
九州大学

<https://doi.org/10.15017/18122>

---

出版情報：中国哲学論集. 16, pp.69-82, 1990-10-10. 九州大学中国哲学研究会  
バージョン：  
権利関係：

陳垣撰 野口善敬 訳註

『訳註 清初僧諍記』 — 中国仏教の苦悩と士大夫たち —

柴田 篤

『清初僧諍記』の著者・陳垣氏（一八八〇～一九七一）は、近代中国を代表する歴史学者の一人として、我国でも夙に有名である。しかし、その論著は今日まで邦訳されておらず、その意味で本訳著は陳垣氏の研究業績を具体的な形で紹介した最初のものと言えよう。また氏に関するまとまった論説も余り見られないようである。そこで、本書の内容批評に入る前に、陳垣氏の経歴・学問・著書に関する参考文献を、管見の及ぶ限り挙げておくことにする。先ず、その生涯と学術に関する論説としては次のようなものがある。

- (1) 北京師範大学編『陳垣校長誕生一百周年紀念文集』（一九八〇、一一）  
 紀念陳垣校長百年誕辰籌委會「紀念陳垣校長誕辰一百周年」、蔡尚思「陳同志的學術貢獻」の外、文十一篇、詩詞五首、及び後掲(9)の論著目録を収める。
- (2) 劉乃和「陳垣同志勤奮的一生」（『中国当代社会科学家』第四輯、一九八三、三、書目文献出版社）
- (3) 曾慶瑛「現代已故史学家・陳垣」（『中国歴史学年鑑』一九八一年版、一九八一、九、人民出版社）
- (4) 吳懷祺「陳垣先生在歴史文献学上の貢獻」（『史学史研究』一九八四―一、一九八四、三、北京師範大学）
- (5) 蔡尚思「論陳垣老師的歴史避諱学」（『中国近現代學術思想史論』一九八六、一二、広東人民出版社）
- (6) 曾慶瑛「陳垣与明清檔案」（『歴史檔案』一九八二―二、一九八二、五）

- (7) 超璞珊「陳垣先生和近代医学」(『北京師範大學學報(社会科学)』一九八三—六、一九八三、一一)  
 (8) 楊廷福「緬懷新會陳先生对我的教導」(『讀書』一九八一—七、一九八一、七)  
 次に、その著作目録としては、

(9) 劉乃和『陳垣同志已刊論著目錄系年』(一九八〇、一〇、香港大東圖書公司)

があり、膨大な著述を細大漏らさず網羅している。(1)の巻末所収も同じ内容である。著述の中、単行本を集成した書物は、

(10) 『勵耘書屋叢刊』第一集(三種)、第二集(五種)(一九三四刊、影印重刊一九八二、一〇、北京師範大學出版社)

であり、論文集としては以下のものがある。

- (11) 『陳垣學術論文集』第一集、第二集(一九八〇、八二、中華書局)  
 (12) 『陳垣史學論著選』(一九八一、上海人民出版社)  
 (13) 『陳垣先生近廿年史學論集』(一九七一、一一、在萃學社編、崇文書店)  
 (14) 『陳垣史源學雜文』(一九八〇、一〇、人民出版社)  
 これらの著述の中で、主著に関する邦人の書評としては、次のようなものがある。  
 (15) 『元西域人華化考』桑原隲藏(陳垣氏の『元西域人華化考』を読む)『史林』九—四、一九二四、一〇、  
 『桑原隲藏全集』第二卷所収)  
 (16) 『明季滇黔仏教考』道端良秀(『支那仏教史学』四—四、一九四一、一、同誌には『釈氏疑年録』の簡略な紹介もある)  
 (17) 『南宋初河北新道教考』野上俊静(『東洋史研究』七—六、一九四二、一二)  
 (18) 同 右 吉川幸次郎(『圖書』一九四二、八、『吉川幸次郎全集』第十三卷所収)  
 (19) 『通鑑胡注表微』愛宕松男(『集刊東洋学』一、一九五九、五)

また次の文章は、陳垣校長時代の輔仁大學で教鞭を執ったこともある方豪氏が、抗日戦期の陳垣氏の著述につい

て論評したもので、取り上げているのは、『明季滇黔仏教考』『清初僧諍記』『南宋初河北道教考』『中国仏教史籍概論』『明末殉国陳于階伝』『書全謝山先侍郎府君生辰記後』『通鑑胡注表微』外二篇である。

(20) 方豪「対日抗戦時期之陳援庵先生」(『伝記文学』一九一四、一九七一、一〇、のち(13)所収)

更に、歴史家、大学人としての陳垣氏に言及したものは、次の論考が存する。

(21) 増淵龍夫「歴史のいわゆる内面的理解について——陳垣の場合と津田左右吉の場合——」(『近代史学研究会会報』七、一九七二、のち『歴史家の同時代史的考察について』所収、一九八三、一二、岩波書店)

(22) 安藤彦太郎「信仰・学問・愛国心——陳垣と輔仁大学——」(『変革と知識人——建設期中国の思想と学問——』一九五二、一〇、東和社)

また、抗日戦期の北京で陳垣氏と面識があつた松崎鶴雄氏が、次の書の中で、印象を記しており、当時の陳垣氏の風格を偲ぶことができる。

(23) 松崎鶴雄『呉月楚風』(一九八〇、三、出版科学総合研究所) 所収「中国の士君子の書斎」(八〇頁)「広東雑俎」(二〇五頁)「北京の文化人」(二七五頁)

では次に、以上のような文献を参照しながら、陳垣氏の経歴をごく簡単に見ておきたい。本書執筆の意図やその性格を理解する上で必要と思われるからである。

## 二

陳垣、字は援庵、光緒六年(一八八〇)十一月十二日、広東省新会に生まれ、青少年時代を広州で過ごす。やがて、列強による中国侵略と封建制瓦解という激動の時代の中で、反清革命闘争、反帝愛国運動に身を投じ、『時事画報』等の編輯を通して、清朝打倒の革命宣伝の役割を担っていく。更に西洋医学導入の為、同志と光華医学院を設立し、自ら第一回の卒業生となる。卒業後、学院で授講する傍ら、診療に従事し、医薬衛生関係の文章を多く著し、医学史の研究にも力を注ぐ。辛亥革命後、広州で衆議院議員に選ばれてから北京に住み、教育部次長の任に就

く。更に、北京大学、北京師範大学、輔仁大学、燕京大学等で教鞭を執り、京師図書館長、北平図書館委員、故宫博物館理事兼故宫図書館館長等を兼務する。一九一七年に『元也里可温教考』を発表して以来、キリスト教・イスラム教・マニ教・仏教・道教等の宗教史研究や、元史に関する研究などを行い、次々に論著を発表している。また、歴史年代学、校勘学等、歴史学研究の基礎となる文献学的書物をも数多く著している。曾慶瑛(3)によれば、彼のこの時期の研究方法は、豊富な資料、事実の確証、緻密な論証、明白な論述に特色があった。抗日戦争の時期、彼は輔仁大学校長として北京にあって、軍部の威嚇にも動ずることなく、毅然とした姿勢を貫き、『明季滇黔仏教考』や本書をはじめとした、生涯の著述の最盛期と評される優れた業績を残している。中国共産党による北京解放に際して、「青年たちと一緒に止まって、あたらしい社会とは一体どんなものか、自分の眼でみてみよう」(22)所引、胡適(2)あて公開状)と決意した陳垣氏は、北京に留まる。この時、六十八歳。以後、彼は新生中国にあって、北京師範大学校長、中国科学院歴史研究所所長、中国科学院哲学社会科学部学部委員、第一・二・三期全国人民代表大会常務委員会委員等を歴任する。一九七一年六月二十一日、病気のため北京で亡くなる。史学研究と青年教育、また文化行政にその身を献げた生涯であったといえよう。

### 三

さて、一九四一年一月、陳垣氏六十歳の時に公表された『清初僧諍記』三巻は、明朝最末期から清朝康熙年間にかけて禅門で繰り広げられた諍あざとい(論争、紛争)を取り上げ、詳細な論証を施したものであり、前年に発表された『明季滇黔仏教考』の姉妹編的性格を持つ。本論は十の諍いを十章に分ち、全体を三巻としてまとめている。以下、各紛争の中味を略説しながら、本文の内容を紹介していくことにする。

巻一は「済洞の諍い」、つまり臨済宗と曹洞宗の間でなされた三つの紛争を問題にする。

第一章『五灯厳統』の諍い」は、臨済宗の費隱通容が『五灯会元』に基づいて順治十一年(一六五四)に著した禅宗史書『五灯厳統』をめぐる紛争である。紛争の第一の原因は、『五灯会元』では青原行思―石頭希遷を継

ぐ者とされていた天皇道悟以下の世系を、南岳懷讓—馬祖道一に繋げた点。第二は、曹洞宗の無明慧経・無異元来等を「未詳法嗣」の項に列した上、慧経の嗣たる晦台元鏡、闕然元謙、永覚元賢の三派を載せなかつた点である。つまり、前者により、禅宗五家の中、南岳下に臨済・瀧仰の二派、青原下に曹洞・雲門・法眼の三派が出たとされてきたものを、南岳下に四派、曹洞のみ青原下ということになる。また後者により、当時の曹洞宗の僧侶たちが受け継いできた法系が、分断され無視されることになる。このことが、曹洞宗にとって著しい中傷と受けとめられ、臨済—曹洞の紛争を引き起こすことになったわけである。著者は、紛争の調停者として、その無意味さを告発した筈菴通問・継起弘儲や、雲外行決・蕩益智旭等の発言を引きながら、紛争の顛末を追っている。

第二章「晦山『天王碑』の諍い」は、順治末年で幕を閉じた筈の『五統敝統』の紛争が再燃した問題を取り上げる。費隱の法孫である水鑑慧海が荆州城南の天王寺に晦山戒顯撰の「天王碑」を建立したことに端を発する。費隱が主張した天皇道悟の改属問題を実証するために、彼とは異なる石頭の嗣たる天王の实在を論証しようとしたものであるが、直ちに曹洞側からの猛烈な反論にあう。著者は、洞門の位中淨符の『法門鋤究』を引用して、晦山を諫責した石潮大寧や劍叟空晷の文章を取り上げ、晦山の碑文に関する細かい考証を行った上で、『水鑑六会語録』所収の晦山撰「荆州天王禅寺中興碑記」の信憑性に疑問を差し挟んでいる。

第三章「『五灯全書』の諍い」は、密雲円悟三伝の法孫である霽庵超永が康熙三二年に完成した『五灯全書』をめぐる紛争である。争点は、曹洞宗の世系問題にあった。宋代洞門の芙蓉道楷の下に、丹霞子淳以下、天童如浄に至る五代があつて、鹿門自覚—青州希弁に繋がるという説と、この五代を削る説との対立である。元来これは曹洞内部の論争であつたが、「五代置出」を主張する後者の立場に立つ洞門の拙菴智朴らが、前者の立場に足つて『五灯全書』を著録した済門の超永を批判したことから、両宗の諍いとなる。この紛争に関して著者は、「五代」をめぐる両説を引きながら、宋の南渡に際して、戦火と分裂の中で伝灯の系図に混乱が生じたのであろうと推論し、「これは時代の仕業なのである」と述べている。また、『五灯全書』をめぐるもう一つの争点は、天皇改属問題で依然『五統敝統』の考え方を踏襲したことである。

次に巻二は、「天童派の諍い」で、臨済宗密雲円悟の弟子たちの間でなされた四つの紛争を取り上げている。

第一章「天童塔銘の諍い」は、密雲の塔銘をめぐる紛争で、二期にわたる。第一期は、密雲門下の費隱通容と木陳道恣との間でなされる。密雲の門人たちが徐之垣（心章）に塔銘を依頼するが、費隱は嗣法の弟子の名が列挙されていないことを不満とし攻撃した。これは木陳が密雲に成り代わって付法したことに對する非難であり、費隱の木陳に對する強い不信感がその根底にあったと、著者は論じている。第二期は、木陳と、同門の漢月法藏の嗣・繼起弘儲との間でなされる。密雲示寂十七年後に、今度は木陳が錢謙益に塔銘を依頼する。錢謙益は大の漢月嫌いで、碑文の中に漢月に對し障りのある文章があつたことから、繼起らの反感を買うことになる。繼起は黃梨洲に漢月の塔銘を依頼することによって、これに對抗する。著者は、木陳の塔銘依頼には「新勢力を藉りて旧勢力を排除しよう」という意図があつたのであり、一方、梨洲を立てて謙益に對抗するという繼起の見識には感嘆せざるを得ないと述べている。

第二章「密雲弥布」扁額の諍い」は、費隱が海塩金粟寺に住持していた時、碑亭に掛けていた「密雲弥布」の扁額を、後にここに住した繼起弘儲が改変したことに端を發し、木陳がこれを非難攻撃したものである。著者は、木陳や調停者たちの書簡を引いて紛争の顛末を辿りながら、繼起の嗣である熊魚山を平手打ちにした木陳が終始、繼起を大敵だと見なしていた事実を明らかにしている。

第三章「『靈巖樹泉集』の諍い」は、繼起の『樹泉集』に對して木陳が批判したことに端を發する紛争である。繼起は順治八年の舟山の役に連坐して、木陳と共に東甌で裁判を受け処罰されるが、『樹泉集』はその後に著された語録である。著者は先ず、禅僧の書簡などによって繼起が災難に罹つた経緯を明らかにした後、木陳の繼起糾弾の書簡を挙げ、その批判の仕方は禅僧としての品位を失つたもので、常軌を逸した行動であると評している。

第四章「牧雲『五論』の諍い」は、漢月―繼起師弟を攻撃した『五論』という書物の刊行に始まる紛争である。この『五論』は、漢月の同門である牧雲通門の著とされているが、著者はそのことに疑問を呈する。木陳が生き方を異にするにも拘わらず、繼起批判の際、常に牧雲の言葉を援用する点、『五論』の論調が牧雲の平素の文章と合わない点、木陳の漢月批判の文章と似ている点などから、この書は木陳を声援するために、誰かが牧雲の名前を仮りに刊行したものであらうと推論している。

最後に卷三は、「新旧勢力の諍い」で、清朝に恭順した木陳ら新勢力（武臣派）と、明朝に忠節を尽くそうとする旧勢力（遺民派）との対立を取り上げている。

第一章「雲門寺雪嶠塔の諍い」は、密雲と同門の雪嶠円信を祀った塔をめぐる、漢月の弟子である具徳弘礼と木陳との間でなされた紛争である。雪嶠の塔がある雲門寺の敷地が、具徳が住持する広孝寺によって侵犯されるとした木陳が、雪嶠を厚く崇敬する順治帝の詔書を援用して、具徳及びその後継・三目智淵を攻撃した事件である。木陳は自撰の『禪灯世譜』で雪嶠の名を削除したが、後に順治帝の推賞によって増入しており、著者はこの諍いは、天子に阿り、その威を借りた木陳の巧妙な遣り口であるとし、当時彼に向けられた僧俗の批判文を列挙している。

第二章「平陽寺御書樓の諍い」は、順治帝の招聘に応じた木陳が、下賜された書礼を蔵める為に「御書樓」を建立したことから始まる、玉林通秀らとの諍いである。木陳の応召については、弟子を含めて様々な非難が集中したが、著者は多くの詩を引用して、その内容を紹介し、更に招聘に対して固持し続けた上に心ならずも赴いた玉林と、応召後権勢を笠に着た木陳との相違がそこで見られると論じている。

第三章「善権寺常住の諍い」は、曹洞宗の百愚浄斯とその弟子寒松智操が住持していた善権寺に移った玉林が、洞門の勢力を排除しようとしたことから起きた紛争である。玉林は、いわば寺を略奪したわけで、その後、善権寺は焼き打ちに会い廃墟となる。著者は、木陳と玉林に対して、「抑々両者は、その性格を全く異にしているようだが、新勢力を借りて威圧することでは帰を一にしている。」（一四〇頁）と述べている。

以上、全三巻十章で本論は終わるが、著者は続いて「記余」（余談）を書き記している。これは、本論が門戸の勢力争いのみに終始していた為、宗旨学説をめぐる論争について若干附加したものである。遺民の僧同志の諍い、遺民の僧と遺民との諍いの外、遺民で遺民の僧を批判した事例などを挙げ、門戸のためでない「道義の諍い」も存在したことを示している。著者は、これらの諍いにも、清朝に従うか否かという問題が反映していたと見ている。

以上、本書の内容を概略見てきたので、次にその特色について述べていきたい。



本書の第一の特色は、荒木見悟博士の「序」や「訳者はしがき」にも述べられているように、何と云っても従来綿密な論究が余りなされていなかった明末清初禅宗史の解明に、確乎たる業績を残したという点である。近年この分野の研究は徐々に盛んになり、訳者もその一人であるが、これらの研究の対象は単に禅宗史内部の問題に止まっていなといえる。荒木見悟博士の先駆的業績によっても示されているように、明末清初の思想史は、一口に儒仏道三教といっても、それぞれ極めて複雑多岐にわたる思想の絡み合いから成り立っており、また、仏教思想に関しても、特定の宗門・宗派・教学といった単一的な観点からだけでは解明することは不可能なのである。従って、明清期の歴史や文化を様々な角度から解明していこうとする者にとって、この時期の仏教界の動向に関する確な認識が求められていると同時に、この時代の仏教史の研究は、広く士大夫社会の情勢に対する十全な目配りが必要とされているといえる。明清仏教史に関する陳垣氏の一連の研究は、まさにその意味で貴重な業績であり、今日においても一度は通読しなければならない研究文献であるといえる。著者が「小引」の中で、「(仏教の) 語録中に記されている遺聞逸事が、歴史書の欠けた部分を充分に補うことができる」と述べていることから、本書が以上にような視点を明確に意識した上で執筆されたものであることが窺われる。

従って、本書が禅門の紛争を対象としながら、彼らを取り巻く居士やその他の士大夫たちの思考や行動に細心の注意を払うことによって、明清鼎革の激動の社会を生きた人々の多様な姿を鮮やかに浮かび上がらせることに成功しているのは、第二の特色といえよう。儒教史や文学史の上で取り扱われている人々が、禅門の僧諍とどのように関わったのかということ、改めて彼らの思想や行動を考察し、その位置付けをはかる上で重要な観点を提供するものといえよう。また、禅門の人々が激しい社会的変化の中で、どのように揺れ動いていったかということを如実に示しているのである。

次に挙げるべき特色は、以上のような問題を解明する為に、著者はその時代のあらゆる資料を博く渉猟し駆使しているという点である。僧諍の全貌を明らかにする為に、膨大な内典外典の資料の山から博引旁証していく論述方

法は、余人を以ては替え難いものであり、至巧な職人芸にも比すべきものがあるといえよう。

第四に指を折るべき特色は、これは本書の趣旨という意味では最も重要なものであり、訳者も「はしがき」で指摘していることであるが、清初の僧諍の根底にあるものとして、遺民派と忒臣派の対立という視点を導入した点である。満州族支配という清初の社会情況の中で、禅僧がどのような生き方を選び取り、更に士大夫がそれに対し、いかに対応していったかということを明らかにしたものと見える。

これらの特色の外、陳垣氏の原書は、巻首に「禅家五家宗派表」「清初济宗世系表」「清初洞宗世系表」「明清間僧諍年表」が掲げられており、本文に登場する僧侶たちの位置関係を見る上で大変参考になる。

さて、以上、本書の特色として注目すべきことがらを列挙したわけであるが、次に著者の分析と論述のあり方について、筆者がいささか疑問に思う点について述べてみることにする。

## 五

先ず第一に、明末清初禅門の紛争・論争をとり上げているにも拘わらず、専ら門戸の勢力争いに力点が置かれ、全体として宗旨論争に関してはほとんど触れないままに置かれているという点である。確かに、「記余」の中で若干その点に言及してはいるが、本論十諍の分析において、その点に関するアプローチがほとんどなされていないということは否定できない。

例えば、巻二の第一章で密雲の塔銘をめぐる漢月の問題を取り上げているが、この際著者は、密雲―漢月の師弟間における臨济宗旨論争について一切言及しておらず、訳者が注⑭で指摘しているように、黄梨洲の漢月塔銘を引用しながらも、師弟論争に触れた部分に関しては全く削除している。これは、黄氏の銘が錢謙益の密雲塔銘に對抗してその漢月批判をかすすために書かれたということを論証する目的で引用したもので、当該部分は直接関係がないと判断されたとも考えられるが、そもそも密雲―漢月の宗旨論争の根底にあるものあたりから、その後の紛争を見ていくような視点を欠いているといえないだろうか。後述するように、著者は木陳や錢謙益に対しては

極めて批判的で、漢月派である継起と黄梨洲の立場を支持するために、ここであえて密雲―漢月の宗旨論争には立ち入らなかつたという見方はうがち過ぎであらうか。いずれにせよ、本書の中央に位置する「天童派の諍い」の中で、宗旨論争の本身に言及していないということは、問題解明に一面を欠く恐れなしとしない。

訳者は、別稿において、こういった点に論及し、「この様に陳垣が門戸勢力の争いと断じた清初の僧諍の裏には、種々の宗旨論争が何らかの影響を及ぼしていたと思われる。よって明末に於ける密雲・費隱を核とした臨済内部、更には済洞間の宗旨論争を解明することが、清初の僧諍を解明する上にも不可欠なことなのである。」と断じている（「明末清初僧諍研究資料について」一九八七、一二、『第一届中国域外漢籍国際学術会議論文集』所収）。この点、訳者の宗旨論争に関する一連の論考は、以上の欠を埋めるものとして注目される所である。

第二に問題としたことは、前節で本書の第四の特色とした点に関連してである。一読すれば明白なように、著者は僧諍を分析するにあたって、遺民派（継起弘儲や黄梨洲ら）と式臣派（木陳道忞や錢謙益ら）の対立という図式化を行った上で、前者を肯定的に、後者を否定的に捉える立場に立っており、この間の褒貶は実に徹底しているといえる。だが、ここに問題はないかどうかということである。

例えば、巻二の第三章で、木陳が継起を糾弾した際、調停をしようとした継起の嗣・能魚山を木陳が平手打ちにした事件に触れ、これは彼が順治帝より紫衣を賜った後のことであり、「魚山は明の遺民であるのに、成り上がりの身である木陳は彼を侮り、君子である魚山を騙したに他ならないのである。」（七一頁）と述べている。先に述べた図式を適用した上の評価である。従って、継起の傲慢と驕奢を告発した木陳の書簡を引用してはいるが、木陳が継起を深く悪んでのこと、と触れる程度で、その点に関する検討を深めようとはしていない。つまり、紛争の一方の当事者である木陳の立場に立ってその主張を考察してみるということをしないのである。

本書は、特に巻二・三において顕著なように、ある意味で木陳弾劾の書とも言うべき性格を備えている。本書には、木陳に対する、ほとんど嫌悪や憎悪の情ともいえるべき論調が流れている。例えば、継起を批判した木陳の書簡を引いて、「木陳の批判の仕方は、まるで村の女が町中（まちなか）で悪態をついている様なもので、立派な禅僧としての品位を失っている。」（八五頁）と非難し、具徳を暗に中傷した文章を引いては、「木陳のその狭い料簡は、何とも見下

げはてたものである。」(一一三頁)と扱き下ろしている。また先に挙げたように「成り上がりの身である木陳は」といった言い方にも、木陳に対する侮蔑的とでもいふべき視線を見ることが出来る。かくして、木陳の立場からの問題掘り下げという視点が完全に閉ざされているといえる。だが果たして、木陳を「変節者」「俗物」と決めつけるだけで問題は解決するであろうか。彼自身の思想をその立場において再検討する余地は本当にないのだろうか。例えば、一二四頁に引用されている木陳の「宝奎説」に見えるような、仏者の現実社会に対する関わり方に注目した考え方が、全く私利私欲に出るものだとしたことだけで片付くであろうか。そこに時代を生きる禅者としての木陳独自の思想を読み取ることも可能なのではなからうか。

以上のような点、本書の論述が非常に広汎な資料を博引しながら構成されているにも拘わらず、全体を通じて、やや一方的な見解に傾いているという印象を拭い得ない理由であろう。また先に取り上げたような、宗旨論争を避けて門戸の争いに専ら力点が置かれているという問題も、この毀誉褒貶の徹底化と密接に関係しているともいえず。では、著者はなぜこのような、いささか強引ともいふべき方法で本書を執筆していったのであろうか。そのことを考えてみる必要がある。

## 六

本書執筆の意図に関して、陳垣氏は公刊から二十年を経た一九六二年三月、中華書局から出された再版本の「後記」の中で、次のように述べている。(括弧内は筆者。以下の引用も同じ。一部補訂する。)

「一九四一年(本書発表の年)、日本軍は既に北京と天津を占拠してしまい、売国奴たちの中には、意気揚々と隊を組んで日本へ渡って御機嫌を伺い、帰ってきてからそれを榮譽として同郷の人々に自慢する者がいた。ちょうどその頃、私は諸家の語録を閲読していて、感ずるところがあったのでこの一編を作ったのであり、単に木陳ら諸僧〔を批判弾劾する目的〕のためだけに発表したものではない。」(一六〇頁)

つまり、清朝に仕えた木陳らの中に、日本軍の占領統治に協力する傀儡政権を始めとした「漢奸」(裏切者、売

国奴)の姿をだぶらせていたのであり、木陳に対する激烈な非難と侮蔑は、実は彼らに対して向けられていたことがわかる。一方、明の遺民である僧俗に対する彼の好意的態度には、抗日戦に挺身する人々に対する強い共感と、被占領下の国土と国民に対する熱い思いが込められていたのである。このことは、本書の前後に著された他の作品に關しても言えることである。陳垣氏は、劉乃和(2)に引く、一九五〇年のある書簡の中で、当時のことを次のように回顧している。

「九・一八(一九三一年、満州事変勃発)以前は、同学の為に嘉定錢氏(大昕)の学を講じていたが、それ以後、世の中が急速に変化したので、顧氏(炎武)の『日知録』に変え、事功に意を注ぎ、経世の学はここにあると考えた。(一九三七年に)北京が陥落した後、「占領された」北方の士気が萎靡したので、全謝山の学を講じて振いたたせた。謝山は降人を排斥し、故国の思想を激発した(「からである」。私の『旧五代史輯本発覆』(三七)『明季滇黔仏教考』(四〇)『清初僧諍記』(四一)『南宋初河北新道教考』(四一)『通鑑胡注表微』(四五)等は、皆この時期の作品であり、報国の道はここに尽きると考えた。刊行した著書は数十万言、道士や僧侶、歴史や考据を論じてはいるが、皆託詞(かこつけた表現)であって、実は漢奸を斥け、日寇(日本の侵略者)を斥け、当政を責めるものに外ならなかった。」(一〇三頁)

この点について方豪氏(20)は、個々の著述を挙げながら、抗戦人士に対する敬慕の情、抗戦必勝の信念、漢奸に対する激烈な批判などが随所に込められており、陳垣氏の愛国の思想が溢れ出た作品群である、と論じている。更に劉乃和(2)は、陳垣氏の「史学研究上の卓越した成果」の一つとして、「抗日戦争時期の『歴史によって政治を論じた』著作」という項で詳しく論じており、「自己の史学研究と課堂教学とを陣地として、愛国主義を宣伝し、民族の気節を発揚し、淪陥(被占領)地区人民の闘志を鼓舞した。」(一〇六頁)と総括している。

以上のように見てくるならば、本書における陳垣氏のねらいは実に明確であったといえる。現実の問題から遊離した、単なる過去の事実の考証に止まるものではなかったのである。陳垣氏の歴史解釈の問題に関しては、増淵龍夫氏(2)のすぐれた論考があるので、参考にしていただきたい。増淵氏は、『通鑑胡注表微』を例に挙げて、陳垣氏の内面的歴史理解のあり方に言及し、「中国の人々の歴史理解なり、歴史解釈の基底には、常に現実の問題がふま

えられており、過去と現実とが、時間を越えて、追体験による内面的理解によって主体的に交流している」(同書一〇〇頁)と論じておられる。

このように、当時における陳垣氏の歴史理解の根本問題を考えていくならば、一九四一年に発表された『清初僧諍記』という書物の性格はかなりはつきりしたものであるであろう。本書は、こういった視点に立って書かれていくことを十分に考慮しつつ読まれるべきものであろう。もちろん、この点は本書の学術的価値を貶めるものではなく、明清禅宗史研究の優れた先達として、今後もその意義が失われることはないといえよう。むしろ我々は、陳垣氏の本書執筆の意図とその根底にあったものをしっかりと押さえた上で、本書を読み解いていくことが重要であり、その時に初めて明末清初の禅宗史・思想史の問題だけでなく、被占領下の中国における一歴史家の思想というものに対しても十分に理解し考察する道が開けるのではあるまいか。

## 七

最後になったが、本書の訳註書としての特色について述べておきたい。仏教史の研究文献を読む場合、何よりも原資料自体に特殊な用語や概念が多く、専門家でないと、取り付きにくい印象を受けがちである。著者が「小引」でも触れているように、「宗門の慣例制度」に不慣れな者にとっては、原典の引用がかなりの部分を占める本書のような文献は、誠に読みづらいものといえる。その点、この訳著のような平易で丁寧な口語訳は、大変有難いものである。更に訳者は、本文の読解を助ける為に、実に行き届いた膨大な量の注釈を施している。特に本文に登場する人物に関しては、直接僧諍に関係しない者を含めて、その伝記資料や著述などについて詳細に注記しており、巻末の人名・書名索引と合わせて利用すると、大変便利なものといえよう。また人名や事項に関する注釈の中で、関連の研究文献を広く指摘紹介しており、これによって近年の明清仏教史研究の動向を瞥見することもできる。更に、原著巻頭の「宗派表」「世系表」についても、各僧侶の生卒年を記した上、順番に番号を打ち、訳註巻末に訳者が製作した「僧伝・著述一覧」と照合させている。この「一覧」は、明末清初の臨濟・曹洞の禅僧百三人を取り上げ

ており、僧諍に関する資料の所在を検索する為だけでなく、明清仏教史研究の為に大変便利な工具書が与えられたと言ふべきだろう。詳細な注釈を含めて、訳者の綿密な調査と考証に敬意を表したい。なお、巻末に附録として、原著の影印が載せられており、これもまた便利である。ただ、一言注文を付けたことは、前節で述べたような陳垣氏の本書執筆の意図に関して、「訳者はしがき」では全く触れていない点である。一般読者に対しては、やはり若干の解説があつて然るべきだと思われる。

## 八

以上、本書の意義、及び若干の疑問点、並びに訳註書としての特色等について述べてきた。筆者は、中国禅宗史の専門家でない為、陳垣氏の原著の内容、並びに野口氏の訳註に関しても理解が及ばなかった点、誤つて受けとめた点などが多々あると思う。一面的な紹介と批評に終わったのではないかと恐れる。訳者、並びに今は亡き著者に対して、御寛恕を請う次第である。

本書が単に過去の禅宗史の問題を考えるだけでなく、広く中国の宗教思想史に対して新たな目を向けさせ、更に歴史理解の問題を考察する為の一助となるならば、そこには極めて今日的な意義が存するといえよう。

(一九八九年九月二五日 中国書店発行 A5版 箱入  
訳註二四五頁 附録原著影印 九四頁 索引付 九〇〇〇円)

〔附記〕陳垣氏に関する資料の収集に際して、北京師範大学の周桂鈿先生に大変お世話になった。記して感謝申し上げます。